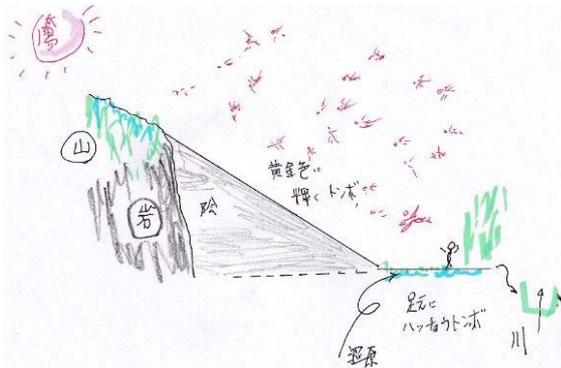


21 世紀の地方創生— 輝く大地の復元・永遠の少年からのメッセージ

(第1話) 春 5 月、日には覚えてない。小5の僕はその日1人だった。捕虫網を片手に、三角ケースをベルトに、てくてく出かけた。自宅から小一時間。浜の瀬川の陰陽石から上流に行くことさらに10分。ハイキングコースを離れ、藪で隔てられた中に入ってアッと驚いた。

なんと！ おびただしい数の、種類も違うトンボが飛んでいた。逆光線を受けた羽は金色に輝き、陰に入ると見えなくなってしまう。



(絵-1) 午前中、僕は東を見上げている。

そこは田圃2枚ほどの湿原で、端っこしか歩けない。ふと足元を見た。ヒラヒラララ・・・と、何かが飛んだ。ひと飛びせいぜい2メートル。じっと見つめた。なんと！ 一円玉より小さいトンボだった。調べても図鑑にない。それがハッチョウトンボと知ったのは、生物の先生がわが家にとんできたからだ。町で最初の発見だということで、僕の名前と一緒に新聞で紹介された。昭和25年、終戦5年目の春のこと。



ハッチョウトンボのメス



オス

僕は年に数回は訪れて「元気かい」と声をかけていた。やがて、食糧増産の掛け声とともに、湿原には農薬がまかれて田植えされた。だが育たず、次には杉が植わって放置された。こうしてトンボの聖地は減ってしまった。時は経過し、高校を卒業。

僕は悲しみのうちに、進学のために故郷を後にした。何のために生きるのかわからなかった僕は、その後、焼石の上を転げまわるような日々を送り、癌にかかったりして第一線を退き、それからは故郷にも帰れるようになった。「あの日のトンボの聖地を復元したい」。その想いは通じ、8歳年下の友人が協力して

くれることになった。木漏れ日がやっと届くジャングル。ハグロトンボがたった一羽。やがて友の建設機械で木々を伐採、日差しが帰ってきた。最初の発見から74年が経過。ハッチョウトンボが帰るには至らず、僕は首を長くして帰りを待っている。



健全な時の湿地



ジャングル探検



伐採後、水が次第に澄んできた！

(第2話) 2024年9月1日、新聞記事によると「地方創生の成果不十分 68%」とのこと。もし、地方創生の目的が、人口減少克服と、東京一極集中の是正だけならば「成果は不十分」というより“地方創生政策自体が失敗である。なぜ失敗か。成功するはずがないからである。

原理は単純で、水は低きに流れ、人は高きに流れる、即ち、稼がねばならない若人は、生産性の高い首都等大都市に向かうのが必然であり、その根本を糺さずして、逆の流れをもくろむ“地方創生”が成功することは原理的にもありえない。

そこで思う。地方創生を、人口減少対策や敵疎社会構築より以上に、**輝く大地の復元**を重点目標とすることもできる。

秋には鈴なりに、熟し柿に群れていたメジロ。庭先のスズメ、捕獲禁止となって増えたはずの小鳥が種類を問わず激減している（僕だからこそ気づいている）。この事実は、どこの環境も汚染され、生物多様性が失われ続けていることを物語っている。よってその浄化は喫緊の課題であり、輝く大地への回帰は、地方創生の精神を実現しているといえるだろう。

至る所、ビオトープを作ろう。子どもがこんなに喜ぶ場所はない。九州のどこかで、環境学習用に朱鷺の分離飼育を始めよう。ドジョウが生育する水辺をはじめ、一帯の環境整備、学習に訪れる若者のための拠点施設が必要で、ちょっとした朱鷺の城下町ができる。

(第3話) 最終氷期が1万年前に終了すると、いよいよ人類は本格的な活動期に入り、日本列島は縄文時代を迎えた。以来、7,500年が経過（今日より2,500年前）して出現したのは弱肉強食の世界だった（こ

の点は“共生の文化”を持つ縄文日本と異なる)。この事態を深刻に受け止め、シンクロのように澎湃として現れたのが、孔子（紀元前 515 年）、孟子（同 330 年）、孫子（孫武、同 535 年）、釈迦（同 584 年）、プラトン（同 387 年）・アリストテレスなど、今に通じる偉人群であった。（かっこ内は生存年の中央値、ほとんど 2～3 百年の間に収まる）。論語も中庸も旧約聖書もそのころ成立した。彼らが一様に訓令、奨励したこと、それが「温暖社会を目指せ」であった。秩序無き弱肉強食の世界が母体となって人類の叡智が誕生したのである。世界の 4 大文明（メソポタミア、エジプト、インダス、黄河）が形を成したのも同じ時期である。

「温暖社会」を現代に当てはめると、家庭から独り立ちして人生を歩み始めた若人にとっての暖かい社会（出産子育てのための所得保障等が完璧に行われる社会）であって、昨今の寒冷社会（経済的弱肉強食社会）を前提としての出生率の向上はあり得ない。（なお、一つの社会には富裕者と貧乏人がいて、富裕者には温暖だが貧乏人には寒冷という関係がある）。

考えてみてほしい。人類は金銭的な栄華を誇る一方で、灼熱地獄に襲われ、かつ、主義主張の相違から、対立と分断、衝突の危機にたえず直面している。

「国破れて山河あり」。あのころ大地は瑞々しく輝いていた。すべての生きとし生けるものの命輝く大地のよみがえりこそ、求めるべき、地方創生ではないか。21 世紀、文明はそういう方向に進化しなければならない。

（第 4 話）

線状降水帯が発生するようになったのは、2014 年、広島県での豪雨から、とのこと。以来わずか 10 年、それほど温暖化には加速度がついている。今年もコーヒー色の濁流が東北地方を襲っている。気になることは、「初めての経験です」「ここまで水位がきました」などと、被災者の感想めいた話だけで、どうなれば、どうすればいいのか、ビジョンが語られないことである。

アフリカには、綿の木と呼ばれていた巨木がある。しかしなぜか、首都ではこの木が切り倒されているのだ。薪にするのかもしれない。あれほどの巨木。成長する間、かなりの二酸化炭素を固定するにちがいない。そこで、夢ではあるが、「綿の木一億本を植えよう」というプロジェクトを提案したい。





2枚目の写真では、筆者が切り株の隣の巨石に立って両手を挙げている。これでデカさが分かるだろう。西アフリカのシェラネオーネの首都フリータウン。アフリカの広範囲で森林化できないだろうか。UNDP（国連開発計画）が音頭をとって、世界各国が参加するプロジェクト。その延長上に、次のプロジェクトが待っている。

かつて緑豊かだった地球は、牧畜、放牧等によって砂漠化していった。サヘル地域の砂漠化はそう遠い昔のことではない。地域の緑化に、日本（人）ほど貢献してきた国はないのではないか。中国のゴビ砂漠での遠山正瑛・元鳥取大学名誉教授の活動。アフガンでの医師・中村哲氏の緑化事業。こうしてやればできることはいくらだってある。温暖化防止は不可能ではない。

（終わりに）

84歳となった僕は、静かに人生を振り返って、自分が何をなすべきかが分かった気がしている。僕は、あの日のトンボに支配され続けてきた。これからもそうで、僕のライフワークは「輝く大地の復元」。その実現を死ぬまで求め、また多くの人びとに訴え続け、特に若人の共感を得て一緒に活動したいと思っている。（了）